

# 『カラム』の最後の2年間

## ——マレーシア移転後の『カラム』

山本 博之

1950年8月にシンガポールで創刊された月刊誌『カラム』は、発行者兼編集者であるエドルスが事故死した1969年10月まで約20年間にわたって刊行が続いた。最後に刊行されたのは第228号で、創刊から停刊までの231か月間で刊行されなかったのは4か月のみだった<sup>1)</sup> 刊行がなかった1967年9月の第206号から1968年1月の第207号までの間にカラム出版社はシンガポールからマレーシアのクアラルンプールに移転した。したがって約20年間に及ぶ『カラム』刊行の最後の2年弱(22か月)はマレーシアで刊行されている。

本稿では、カラム出版社のシンガポールからマレーシアへの移転の背景を整理した上で、『カラム』の最後の22号分の記事をもとに、志半ばで世を去ったエドルスがマレーシアで『カラム』を刊行することにどのような思いを抱いていたかを考えてみたい。

特に断らない限り、本稿で言及される誌面や記事は『カラム』の誌面や記事を指す。なお、本稿で主に参照するのは社説とコラム「苦いコーヒー」である。「苦いコーヒー」はカラム出版社ではなくコラム執筆者の見解を表明するコラムという立場を取っているものの、「苦いコーヒー」の執筆者がエドルスであることは多くの読者に知られた事実だった。本稿の前半では『カラム』、後半ではエドルスについて言及しているが、ほとんどの場合に両者は同じものを指している。

### 1. マレーシアへの移転——第三次中東戦争

『カラム』は1968年2月号の社説でマレーシアへの移転の背景を説明している[*Qalam* 1968.2:3]。それによれば、移転の直接の契機となったのは第三次中東戦争の端緒となった1967年6月5日のイスラエル軍によるアラブ諸国への侵攻だった。これより前、

『カラム』はエジプトのイスラム政策を批判する書籍を出版しており、友好国の心証を悪くするものを出版すべきでないとアラブ連合共和国から抗議を受けたシンガポール政府から、エジプトを批判する記事を書かないようにと警告されていた<sup>2)</sup>。

『カラム』はこの警告に納得していなかったが、1967年6月のイスラエル軍による侵攻により、バイトゥル・ラハム(ベツレヘム)の占領によりイスラム教の共通の敵となったイスラエルに対抗するためには過去の対立を忘れて協力することが必要だと考え、アラブ連合共和国の大使館に連絡して協力を約束した。『カラム』は1967年7月号にイスラエルを批判する記事を掲載し、同号の表紙にエジプトのナセル大統領の写真を掲載した<sup>3)</sup>。

この号が発行された1967年7月末、カラム出版社はシンガポール文化省のガザリ・イスマイル政務官から電話で警告を受けた。ガザリは、『カラム』が警告を無視してアラブ連合共和国を攻撃する記事を掲載したと非難し、シンガポール政府は『カラム』の発禁およびカラム出版社の印刷ライセンスの即時取り消しを行うと警告した[*Qalam* 1968.2:3-4]。

1967年7月号の誌面にはアラブ連合共和国またはエジプト政府を攻撃する記事は見当たらず、ガザリの非難がどの記事を指しているのかははっきりしない。後述するようにこの時期にシンガポールはイスラエルとの軍事協力を進めようとしていたため、『カラム』によるイスラエル批判を好ましくないと考えた可能性も考えられる。いずれにしろ、この電話のやり取りを経て、シンガポールではイスラム教の精神と影響を排除するだけでなくイスラム教をしだいに排

1) 1965年6月に刊行がなかったが、その前月に第178・179合併号が刊行された。

2) アラブ連合共和国は1958年にエジプトがシリアと連合して作られた国家。1961年のシリアの離脱に伴い連合は瓦解したが、エジプトは1971年までこの名称を名乗った。本稿が扱う時期にはエジプトとアラブ連合共和国は実質的に同じものを指す。  
3) 筆者がマレーシアとシンガポールの図書館で確認できた1967年7月号の表紙は一部が黒塗りされており、ナセル大統領の写真は確認できるが、その周囲にどのようなことが書かれていたかはわからなかった。

除するための措置が講じられているという思いが強まり、そのことがカラム出版社のマレーシア移転の背景となった。

ただし、カラム出版社の移転が読者に伝えられたのは1967年7月号の誌面で、カラム出版社は1967年7月1日付けでクアラルンプールのクラン通りに移転すると告知された〔*Qalam* 1967.7:20〕。この告知は1967年7月末のガザリからの電話で移転を決めたという記述と食い違う。誤植でないとしたら、ガザリからの電話の前にマレーシア移転が決まっていたということになる。

政治や宗教のあり方をめぐるシンガポール政府との対立に加え、ムスリム人口が小さいシンガポールで商業誌としてイスラム系雑誌を刊行することの困難もあったものと想像される。シンガポールで『カラム』を発行してきた約17年間を振り返ったエドルスは、変化が大きいシンガポールではイスラム教の純粋さに基づいた雑誌が地位を拡大するのは難しいと語っている〔*Qalam* 1968.1:3〕。

カラム出版社のマレーシア移転に伴い、シンガポール政府は外国の出版物となった『カラム』のシンガポールでの輸入、販売、配布を禁止した〔*Qalam* 1968.1:4〕。

## 2. シンガポール批判 ——イスラエルによる軍事協力

シンガポール政府およびリー・クワンユーに対する批判は、カラム出版社がマレーシアに移転してシンガポールが外国になった後も続いた。

1967年7月にイギリスはシンガポールに駐留させていた軍を1970年代半ばまでにすべて撤退することを公表し、さらに1968年1月にはその時期を前倒して1971年3月末までに撤退を完了すると公表した。シンガポールがイギリス軍の撤退時期の延長を求めてイギリスと交渉を行っている伝えられると、『カラム』はかつての植民地支配者であるイギリスに軍の駐留の延長を求めるのかと批判している〔*Qalam* 1968.2:2; 1968.6:47〕<sup>4)</sup>。

これは言葉の上では反植民地主義的なナショナリズムとも理解できるが、『カラム』の批判の理由はそこではなくムスリムの連帯を妨げることへの反対に

4) この記事ではリー・クワンユーを英語名でハリー・リーと呼んでいる。イギリス風の名前を持っていることをイギリス由来のものをありがたがっていることと捉え、イギリスによる支配に甘んじていることと結びつけるという皮肉が込められていたのかもしれない。

あったようである。シンガポールは1967年に義務兵役 (national service) を導入し、イスラエル軍に軍事教練を依頼していた。『カラム』は、天然資源がないシンガポールは近隣諸国と有効な関係を築かなければならないにもかかわらず、イスラエルと軍事的に手を結ぶことは近隣諸国とりわけムスリムが多数である国々に敵意を産むことにしかならないと警告している〔*Qalam* 1968.2:2; 3-4; 1968.9:48〕。

## 3. 民族融和による政治の世俗化

エドルスは、マレーシアへの移転について、1965年8月のマレーシアとシンガポールの分離の際にラーマン首相がシンガポールのマレー人に対してマレーシアへの移住を呼びかけており、この呼びかけに応えたと説明している。エドルスはイスラム教が国教であるマレーシアに移住できることに感謝するとともに、ラーマン首相の寛大さにも感謝を表明した。

エドルスがかつて批判していたラーマンのもとでマレーシアの宗教、国家、民族に貢献する意図を持ったことは興味深い。『カラム』は創刊当初にマラヤおよびシンガポールのマレー人ムスリムの政治指導者や宗教指導者を厳しく批判しており、後にマラヤ（およびマレーシア）の首相になるラーマンも批判の対象だった。ラーマンは『カラム』を文字通り火で燃やすパフォーマンスを行い、自身が所属するマレー人政党の統一マレー人国民組織 (UMNO) の関係者が経営する喫茶店が『カラム』およびカラム出版社の雑誌を購読することを禁じた。これによりカラム出版社は『カラム』以外のいくつかの雑誌が発行停止に追い込まれていた。

もっとも、エドルスはラーマンの指導性を全面的に受け入れたわけではなく、そのことはすぐに明らかになる。1967年7月号の「苦いコーヒー」は、総選挙に向けてラーマンが支持を求めるために述べたことに苦言を呈している。ラーマンは、マレーシアではホテルは満室、マッサージ店も満員、競馬クラブも人でいっぱい賑わっているが、もしイスラム政党の汎マラヤ・イスラム党 (PAS) が選挙に勝って政権を握ったらホテルもマッサージ店も賭博場も閉鎖されて国の税収が大きく損なわれ、国民の生活にも悪い影響を与えるだろうと警告した。国家の発展や国民の生活向上のためにホテルやマッサージ店や賭博場の繁盛を好ましいものと捉えるラーマンの考え方は、

エドルスが適切と考える社会のあり方と異なるものだった〔*Qalam* 1967.7:43〕。

マレーシアは多数派のマレー人だけでなく華人、インド人、先住諸族から成り、華人、インド人、そして先住諸族の多くは非ムスリムである。ラーマンを党首とするマレー人政党のUMNOが華人政党のマレーシア華人協会(MCA)とインド人政党のマレーシア・インド人会議(MIC)とともにマラヤ連盟党を結成し、その総裁としてラーマンが首相に就いた。ラーマンおよびUMNOの政治指導者たちは、マレーシアが多民族・多宗教社会であるという現実を受け入れ、その中でマレー人の地位向上を追求し、イスラム教の実践を模索した。

これに対し、イスラム教の教義に照らした国家運営がなされるべきとの立場を貫いたエドルスは、立場としてはPASに近かったと言える。エドルスは、マレー人を主要支持基盤とするUMNOとPASが互いに対立しているためにムスリムの利害が十分に代表されていないことを憂慮していた。独立当初の政治家たちが会議で激しく意見を戦わせても会議が終わると互いに友達どうしの付き合いを行ってきたのと異なり、UMNOとPASの議員どうしは会議以外で互いに会おうとしないし、相手側の党員の葬儀にすら出席しないことに懸念を示した〔*Qalam* 1968.1:4; 1968.2:2〕。

#### 4. 女性による女性の地位と生活水準の向上

エドルスとUMNO指導者の考え方の違いは、女性の社会的地位や公教育のあり方などをめぐってさらに顕在化していく。

ラザク副首相が測量士協会の晩餐会でスピーチを行った。クアラルンプールの「教育を受けたマレー人ムスリム女性」が「夫を飼い馴らす行動組織」(Kumpulan Bertindak Mengawal Suami<sup>2)</sup>)を名乗って活動を行っているらしいという話を紹介し、妻に管理される必要がある夫がいることは認めるが、自分のような善良な夫は妻がそのような組織に参加する必要はないし、臨席している測量士たちにもその心配はないようだと言った<sup>5)</sup>。「苦いコーヒー」はラザクの発言を紹介した上で、妻が夫を管理するのは宗教の教えに反しており、このような活動を受け入れるのは宗教についての学びが希薄で表層的なイス

5) 元の報道が掲載されたのはUtusan Melayu(筆者は未確認)。

ラム教徒であると批判した〔*Qalam* 1967.7:43〕。

これと別に、ラザクが言及した女性組織の発想のもとになったと考えられる4人の女性が公開書簡によりラザクの発言を批判した〔Berita Harian 1967.6.22:2〕。ザレハ・アブドゥル・ジャリル(Zaleha Abdul Jalil)、アザ・アジズ(Azah Aziz)、ラフマ・ジャマルッディン(Rahmah Jamaluddin)、ハビバ・アブドゥル・マナン(Habibah Abdul Manan)が、「夫を飼い馴らす行動組織」は存在しないと断った上で、今日の女性が直面していることは宴会のスピーチで話題にされたり笑われたりするものではないと明言した。その上で、女性組織が誕生する前からその目標や理想が嘲笑されるようではその女性組織の将来は期待できないとし、そのようなことを言う人物が将来この国の首相になったら女性組織はどうなるのかと批判した<sup>6)</sup>。

「苦いコーヒー」の記事を書く前にエドルスがザレハたちの批判を読んでいたかどうかはわからない。いずれにしろ、エドルスが考えるイスラム教の教義に従った社会のあり方は、独立を迎えた現在、国の政治と経済の改革を進めるにはその国の女性の地位と生活水準に影響を与える改革が最も必要であり、それに取り組むことで国と社会に貢献しようとする女性たちとの間で交わりを見出しにくいものになっていた。

#### 5. 教育制度の世俗化

マレーシアの教育制度が整っていくにつれて、教育の分野でもエドルスと主流派の間の考え方の食い違いが大きくなっていく。1968年5月号の「苦いコーヒー」は、国立学校の開校式に出席したキール・ジョハリ教育大臣が親は子を宗教学校より国立学校に通わせた方がよいと発言したことに触れ、ムスリムであるキール・ジョハリが宗教学校より国立学校の方が優れていると発言したのは信じられないことだと批判した〔*Qalam* 1968.5:2〕<sup>7)</sup>。

6) ザレハたちは1967年9月にマレーシア・イスラム女性行動組織(Pertubuhan Tindakan Wanita Islam Malaysia, PERTIWI)を設立し、農村の女性たちに子(特に女子)に教育を与えることの重要性を伝えるなどの活動に取り組んだ。

7) キール・ジョハリに対しては、1968年7月号の「苦いコーヒー」で、人口増加による食糧不足を防ぐために産児制限を行うべきであるというキール・ジョハリの発言を引き、イスラム教では神はこの世に生まれるすべての子に栄養を与えるために子を殺してはならないと述べ、人間が神の法を犯そうとしているのかと強く批判した〔*Qalam* 1968.7:47〕。



国立学校に関連して、1968年7月号の「苦いコーヒー」は、歴史学者のブヨン・アディルが、アラブ人もドレスを着ることを挙げてマレー人ムスリムの女子もバジュ・クロンではなくドレスを着て学校に行っているかどうかと主張したことに言及し、アラブ人に倣うのであれば顔を含む全身を覆う服装を勧めるべきではないかと批判した〔*Qalam* 1968.7:47〕。

1968年5月30日にマラヤ大学マレー語協会 (PBMUM) が主催したフォーラムで、イスラム教の専門家として登壇したアリ・ムナワル (Ali Munawar) がムスリム女性は頭を覆う必要がないと発言したと報じられたことに対し、「苦いコーヒー」は「新しいイスラム教の専門家」は神の法を破るように人々に教えているのかと問うた〔*Qalam* 1968.7:47〕。ただしこれは日刊紙の記事に基づく批判であり、アリ・ムナワルから事実を説明された後、『カラム』は根拠不足でアリ・ムナワルを批判したことを謝罪して撤回した〔*Qalam* 1968.9:48〕。

## 6. キリスト教への改宗と共産主義化のおそれ

エドルスがこれほどまでにイスラム教の教義に基づく行動を求めたことの背景には、マレー人の間にイスラム教の教義を無視する人たちが出てきたことへの懸念があった。今日のマレーシアでは考えにくいですが、当時はマレーシアのマレー人にイスラム教徒をやめて他宗教に改宗する人がおり、そのことがある程度知られていたようである。ジョホール州ではマレー人のキリスト教への改宗問題が新聞で報じられ〔*Qalam* 1969.3:3-4〕、マレー人には仏教徒やキリスト教徒もいるという記事〔*Qalam* 1969.7:51〕も見られる。

『カラム』は、信仰を失ったマレー人が共産主義を受け入れてマレーシア政府打倒の先兵になるという恐れを1968年10月号の社説で長く論じている。それによれば、今日のマレーシア国民は内なる敵と外からの敵の2つに直面しており、外からの敵は立ち向かって排除することができるが、内なる敵は危険でありながら排除するのが難しい。内なる敵とは共産主義者のことで、政府を転覆させてムスリムを自分たちの信条に引き込もうとする。共産主義とイスラム教の信念は相反するのでムスリムを共産主義に惹きつけるのは難しいはずだが、ムスリムの間に西洋の影響が秘かに浸透すると、イスラム教の教義を

無視して共産主義の信条を抱くことになりかねない。ムスリムがイスラム教の教えに従順であるよう努力を続けなければ、やがてこの国のムスリムは共産主義の影響を受けてマレーシア政府を打倒しようとする共産主義の支持者となるだろう。このように論じた上で、『カラム』はそれを「身体はマレー人でムスリムだが心と魂は共産主義者で、共産主義イデオロギーの道具となるマレー人」と呼んだ〔*Qalam* 1968.10:3-5〕。

マレーシアでは自分たちの宗教であるイスラム教が発展しているにもかかわらず、独立後、多くの人が他の宗教を受け入れてイスラム教から離れているのはなぜなのか。イスラム教の教えに従っていた子たちが今なぜ従わなくなったのか。アリヤムハンマドのように名前はムスリムなのに行動がイスラム教に反している人たちがいるのはなぜなのか。このように問いかけた上で、もしムスリムがイスラム教を棄ててキリスト教を信仰するとしたらそれは全てのムスリムの責任であり、もしマレー人社会が西洋文明の影響を受けているならばそれは全てのマレー人の責任であり、もしモスクに人がいなくて説教ができないのであればそれはその地域の全てのムスリムの責任であるとして、この問題についてイスラム学者たちに任せるのではなくムスリム社会全体が考えるべきだと訴えた〔*Qalam* 1968.12:3-5〕。

この目的のために『カラム』が重視するのが州における宗教行政の整備である。マレーシアは連邦制をとり、イスラム教とマレー人の慣習に関することがらは州が管轄する。スランゴール州は首都クアラルンプールを擁するため<sup>8)</sup>、スランゴール州におけるイスラム教とマレーの慣習に関する宗教事務所および評議会、他州の宗教事務所および評議会と比べて重要性が高い。しかしスランゴール州は国内他州との間で人口の移動が多く住民の入れ替わりの度合いが大きいことから、ジョホール州、ペラ州、クランタン州などと比べるとイスラム教とマレー人の慣習に関する法制度の整備が遅れている〔*Qalam* 1968.11:3-4〕。このため、カラム出版社が拠点を置く州でもあるスランゴール州について宗教行政の整備を求めている。

8) クアラルンプールは1974年にスランゴール州から分離されて連邦直轄区になった。

## 7. 5月13日事件と「カラムの時代」の終わり

1969年5月13日、公式発表で死者196人となるマレーシア史上最悪の民族衝突事件が発生した。5月10日の総選挙および州議会選挙で与党連合が大きく後退すると、クアラルンプールで与党支持のマレー人グループと野党支持の華人グループの間で小競り合いが起これ、他地域にも波及して大きな事件になった。事件の原因は、共産主義者と秘密結社によるものや、ラーマンに対するUMNO内部のクーデターであるとするものなど、多くの説が噂レベルで語られているが、公式の場で語られることなく今日に至る。

事件直後で情報が限定的だった状況で、『カラム』は事件の影響についていくつか記している。

憲法と議会が停止され、ラーマン首相に代わってラザクが国家行動評議会として国家運営の全権を与えられたことについて、「苦いコーヒー」は、ラザクが国民にとって適切かつ有益であると考えた法律を国会の承認を得ることなく制定して国家を運営する権限を与えられたことを歓迎し、有事の際には毅然とした態度で臨むべきと述べた〔*Qalam* 1969.6:51〕。また、『カラム』は5月13日事件を親共産主義者、邪悪分子、秘密結社、反国家勢力が引き起こした名誉棄損と風評被害に端を発した民族的混乱と捉え、ラザクを長とする国家行動評議会の断固とした行動によって民族的混乱が全国に広範に拡大することが回避されたことを称賛した〔*Qalam* 1969.7:3-5〕。

信仰面においては、『カラム』は5月13日事件が若者たちに宗教への回帰を促したと見る一方で、それがオカルト信仰の方向に向きかねないことに警戒している。新世代の若者たちは以前は宗教に無関心だったが、5月13日事件を契機に自分たちは人生のあらゆる瞬間に危険に直面しているという感覚が生じ、そのため全能の神から超自然的な助けを受けることの大切さを理解するようになった。そのため、1日5回の礼拝を行うようになり、礼拝後もそのまま座って聖なる章句を詠んでいる若者の姿を多く見るようになったという。あるいは、宗教教師を訪ねて危害から身を守るための礼拝の方法を学ぶ若者が見られるようになったという。このことに対して、信仰への回帰は好ましいとする一方で、真に神の加護を求めるのであればそのための武具はわざわざ学びに行かなくてもす

で私たちの手の中にあり、必要なのはそれをいつでも使えるようにしておくことであると結んでいる〔*Qalam* 1969.8:3-5〕。この2か月後、『カラム』は未完の連載を抱えたままエドルスの死去によって刊行停止となった。

5月13日事件を境にしてマレーシアの政治と経済は大きく変化した。1970年9月に国会が再開されるとラーマンは首相を辞任してラザクが第二代首相になった。与党連合が拡大して各民族が代表されるがマレー人を中心とする政府が確立し、民族間の経済格差を是正するための新経済政策（プミプトラ政策）が導入されてマレー人を優遇した経済開発政策が進められた。民族間の統合、民主的な生活様式、公正な社会、多様な民族文化、進歩的な社会の実現を掲げた国家理念が定められた一方で、マレー人の特権や民族間の問題は「敏感事項」とされ、公の場で議論することが法律で禁じられた。

これをおおまかに言うと、立場が違う人たちが議会や他の場（たとえば新聞・雑誌など）で言論を戦わせて共通の理解を作ろうとしていた段階から、強い指導者に決定権の大きな部分を委ね、立場の違いについて言論を戦わせるよりも社会全体で経済成長に取り組むことを優先する段階に移行したと言える。前者をカラム（筆）を使って異なる意見を戦わせるという意味で「カラムの時代」と呼ぶならば、1969年10月にエドルスの死によって『カラム』の発行が停止されたことは、「カラムの時代」の終わりを象徴する1つの出来事だったと言えるだろう。

こうしてエドルスと『カラム』はいったん社会の表舞台から姿を消すことになる。『カラム』が再発見されて意義が再評価されるようになるのは、1990年代末以降、半島部のマレー人の多くが経済開発の果実を享受し、経済開発だけでなく自由や公正を重要視する人が増えてからのことである。